
廃校の悪夢 その1

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃校の悪夢 その1

【Nコード】

N6940I

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

廃校になった母校に遊び半分で忍び込んだ同級生、六人。そこに待ち受ける恐怖の体験とは、？

（前書き）

前回、投稿した作品と同じ主人公です。

作：青木弘樹

赤木純一郎：この物語の主人公。二十五歳。

南原ナオヤ：通称ナンナン。純の親友。

掛井ヨウスケ：通称ボウズ。生まれてこの方、髪型は丸坊主。

瀬戸はるな：占いが大好きな女性。

戸田えり：医者と結婚した専業主婦。

安西ななみ：通称なな。デザイナーの専門学校生。

俺の名前は赤木純一郎。ん？どこかで聞いたことある名前だつて？気のせいさ。あるいは同姓同名の誰かと間違えているんだろう。

俺は、いや、俺たちは今、母校である東小学校に来ている。

実はこの学校、すでに廃校になっていて、来週から取り壊しも始まる。少子化の影響もあって、去年、近くにある西小学校と統合されたのだ。

十三年前にここを卒業した俺たちは、古びた校舎を見上げていた。

「さみしくなるな」

「そうね、」

「それにしても、グラウンドってこんなに狭かったんだな」

「そうだよな。自分が子供の頃は、大きく感じたけどな」

現在午後十一時。すでに学校の周りにはフェンスが張り巡らされている。本当は入ってはいけないのだが、久しぶりに集まった勢いで侵入してしまったのだ。

「占いどおりだわ、」

はるながつぶやいた。

「占い？」

ボウズが聞いた。

「ええ、、二年前、カオス斉藤さんに言われたの。数年後、あなたにとって思い出の場所がなくなる可能性があるって、、」

「カオス斉藤ね、、」

カオス斉藤。東京で占い師をやっている女性。本も出している。そこそこの有名。

「偶然じゃねえの？それに数年後って言ったんだろ？」

「いいえ。偶然じゃないわ。カオス先生はすごい力を持っているのよ」

「へえ、、」

夜空の下、なつかしさを感じながら、六人は会話をしていた。懐中電灯は二つある。六人はあわよくば教室にも入ろうかと企んでいた。

「なあ、俺トイレ行きたいんだけど」

ボウズが言った。

「よし、中に入れるかどうか調べてみようぜ」

六人はトイレから一番近いドアへと向かった。

「ん？」

純はドアをさわってみた。

「おい！開いてるぞ！」

なんとドアは開いていた。

「やった。まあ来週から取り壊すらしいから、開いてたんだろうな」

「そうね。どうせ盗まれるようなものもないだろうしね」

校舎は三階建て。職員室は二階にある。トイレは各階に一カ所ずつ。

ボウズは懐中電灯を持ち、トイレに入ってしまった。当然、電気は通っていない。

「ふう」

「おかえり」

「ただいま。しかしさあ、、」

「なんだ？」

「いや、水が通ってないから、ちょっとくさいな」

「もう、汚いこと言わないで」

「じゃあ、手は洗ってないのね？」

「しかたないだろ。まあ気にするなよ。小（小便）なんだからさ」

「駄目よ」

はるながかばんから何かを取り出した。

「はい、これ」

それはウェットティッシュだった。

「おっ、気がきくね。さすがはるなだ」

ボウズはウェットティッシュで手を拭き、ティッシュは廊下に投げ捨てた。

「こらっ、ボウズ」

「なんだよ、いいじゃん。どうせ取り壊すんだろ？ゴミ箱がどこにあるかも分からないしさ」

「まあ、いいんじゃない」

「しかし懐かしいな」

純たちは歩きながら、そして懐中電灯であたりを照らしながら、かたまって歩いていた。

「窓の外に鉄格子があるな」

「ほんとだ。俺たちのいた頃はなかったよな？」

「いや、二階と三階にはあったけど、一階にはなかったよな」

「過保護だねえ。まあいわゆるモンスターペアレンツ対策かな？」

純たちは一階をほぼすべて回った後、再びトイレの前に来ていた。

「なあみんな、肝試しやらないか？」

ボウズが言った。

「肝試し？」

「ああ。今からひとりずつ三階の図書室まで行って、携帯電話で図書室の入り口の写真とってさ、ここへ戻ってくるの」

「ええっ？怖いよ」

「大丈夫だよ。幽霊がでるなんて噂、ここにはないんだから」

「でもなあ、、、」

「、、、」

そんな中、はるなは黙っていた。

「どうする、ナンナン？」

純が聞いた。

「俺は別にいいけど」

「恐いってば」

えりはかなり恐がっていた。

「やりましょう」

はるなが唐突に言った。

「えっ？」

「おもしろそうだし、やりましょうよ」

「はるな」

「よし、決まりだな」

「じゃあ、お前が言いだしっぺなんだから、お前が最初に行けよボウズ」

「ああ。いいよ」

ボウズは懐中電灯を持ち、構えた。やる気まんまんの様子だった。

「じゃあ、行ってくるぜ」

「頑張つてな」

「ははは、楽勝だよ」

ボウズは闇の中へ消えていった。

「あいつ昔から好きだよな、こういうの」

「無神経なんだよ」

「ねえ純、私たち（女）は三人で行ってもいいでしょ？」

「そうだな、いいよ」

「私はひとりでいいわ」

はるなが言った。

「えっ？」

「べつにたいして恐くないわ。えりとななは二人でいけばいいわ。私はひとりで大丈夫」

「さすが、はるな。お前にはカオス斉藤先生がついてるもんな」
「、、、ええ」

「よしじゃあ二番目は俺が行くよ」
ナンナンが言った。

「よし。じゃあ俺が三番目に行くよ」

「じゃあ、えりとまあは四番目ね。私は最後に行くわ」
「う、うん。分かったわよ、もう、、、」

暗い中、純たちはしばらく待っていた。二十分ほどしてボウズが帰ってきた。

「ただいまー」

ボウズは笑顔だった。

「来たな。ちゃんと写真撮ってきたろうな？」

「もちのろんさ」

「古、、、」

見ると、それは間違いなく図書室のドアの写真だった。

「よし。じゃあ次は俺だな」

ナンナンが言った。

「びびって、おしっこ漏らすなよ」

「まさか、じゃあ行くよ」

ナンナンは闇の中へ消えていった。

「どうだったボウズ？」

「ん？どってことないさ。図書室には入れなかったけど、外から見たら、ちよっただけ本が残ってたような感じだったよ」

「そうか」

「、、、」

そんな中、はるなは頭を押さえていた。

「はるな、どうしたの？」

「えっ？いえ、なんでもないわ」

「はるな、まさか何か感じるとか言い出さないだろうな？」

「そんなんじゃないわ。私は占いは信じるけど霊は信じてないし」「そっか」

間もなくしてナンナンが帰ってきた。

「おかえり」

「ただいま」

ナンナンは証拠の写真をみんなに見せた。

「どうだった？」

「うん、やっぱりちょっと恐かったけど、なかなか楽しかったよ」

「よし。じゃあ次は俺だな」

純が懐中電灯を持ち、深呼吸した。

「あれ？純、ちょっとびびってる？」

「ちよつとね。けどまあ大丈夫さ」

「泣いて帰ってくるなよ」

「ははは、じゃあ行つて来るよ」

純は闇の中へ消えていった。

「なな、次だよ」

「大丈夫よえり、二人なんだから」

「絶対離れないですよ」

「なんなら、俺と一緒に行ってやろうか？」

ボウズが言った。

「嫌よ。何されるか分かったもんじゃないわ」

「失礼な。紳士に向かつて」

「はいはい」

その時、

「うわあああ！」

純は走ってこちらに向かってきた。

「ぎゃあああ！」

えりはななにしがみついた。

「、、、、なんてね。ただいま」

純は笑顔だった。

「もう！純、やめてよ！えりが恐がってるじゃない！」

「わりい、わりい」

「はははは！」

ボウズは爆笑していた。

「あ、あんたね、、、いい加減に、、、」

えりはうまく言葉が出なかった。

「ごめんごめん。ちよっとおどかしただけじゃん」

「あんた、、、もし私の旦那の病院きたら、死ぬほどぼったくってやるからね！」

「はははは！」

ボウズは笑い転げていた。

「ごめんって。あとでジューズおごるからさ」

「ふん！なな、もうさっさと行こう！」

「そうね」

二人は闇の中に消えていった。

「純、最高だな。俺よりタチ悪いじゃん」

「ちよっとやりすぎちゃったかな、、、」

「、、、」

はるなはあまり笑っていなかった。

「ところではるな、ほんとにひとりで大丈夫か？」

「ええ。平気よ。子供じゃないんだから」

「ここは俺たちの母校だしな」

しばらくしてえりとななが帰ってきた。しかし、えりはななに抱えられるようにして帰ってきた。

「どうした、えり？」

「出たのよ、、、」

「出た？」

「マジで!？」

「出たのよ、ゴキブリが！」

「はあ！？ゴキブリ？」

「そう。三匹もいたわ」

「ななが言った。」

「もう！なんなのよ、ここは！もう出ましよう、こんなところ！」

「待てよ。まだはるなが残ってるだろ？」

「もういいじゃない。どうせ何も無いんだから！」

「えり、落ち着こうぜ」

「行くわ」

「えっ？」

「私、行くわ」

「はるなは懐中電灯を持ち、さっさと行ってしまった。」

「はるな？」

「はるなは少し様子がおかしかった。」

「行っちゃたね」

「、、、、」

「えりは少しすねていた。」

「しょうがない、待つか」

「ボウズは座り込んだ。」

「ちよつと腹減ったな」

「ナンナンは持っていたガムを口に入れた。」

「えり、ガム食べるか？」

「えりは無言でガムを受け取った。」

「純、えり怒っちゃったぞ。まったく、、、、」

「ごめんよ、えり」

「怒るなってえり。楽しいじゃん。こういう感じのほうがいい」

「ボウズはかなり楽しそうだった。」

「えりはこういうの苦手なの、ね、えり」

「ななはえりの肩を抱いていた。」

「三十分ほどが過ぎた。」

「はるな、遅いな、、、、」

「そうだな」

その時、

「きゃあああ！」

遠くのほうから叫び声が聞こえた。

「！！」

五人は驚いた。

「な、なんだ！？」

五人は焦った。

「今のは、はるなか？」

「、、、」

えりはななにしがみついていた。

「分からない、、、けど、、、」

「はるなのいたずらじゃないのか？」

「はるなはそんなことしない子よ」

五人は動けなかった。

「と、とにかくよ、探しにいきましょう。もしかしたら誤って階段から落ちたのかもしれないし」

「そうだな、、、」

五人は二階に向かった。

静まり返る校内。こうなると、とたんに恐くなる。五人は少し震えていた。さつきまではしゃいでいたボウズさえも、緊張していた。

「はるなー」

「はるなー、どこなのー？」

はるなを探して歩く五人。返事はまったくない。二階をすべて見回った五人は三階に向かった。

「はるな、、、どこ行っただんだ？」

「ひょっとしてもう一階に戻ってるんじゃないのか？」

五人は三階もすべて見回ったが、はるなは見つからなかった。

「どうする？」

「どうするって、、、戻るしかないだろう、、、」

五人は戻ることにした。五人は二階に降りた。

「心配だわ」

ななが言う。

「だから帰ろうって言ったのに」

えりが言う。

「、、、」

五人は二階のトイレの手前に差し掛かった。その時、

「お、おい、、、あれなんだ？」

ボウズが何かを見つけた。

「ん？」

五人は目を凝らして見てみた。

「あ、あれは、、、」

「あれは、、、」

ななが気づいた。

「はるなの、、、Gパン、、、!?」

「!?!」

トイレの入り口から倒れている人の足らしきものが見えた。

「、、、」

えりは青ざめた。

そして、ゆっくり上半身があるほうへと懐中電灯を照らした。

「!?!」

服装から判断して、それははるなだった。しかしなぜか手には軍手をはめられ、頭はというと、被り物のマスクをつけられていた。

マイケルジェイソン（ミュージシャン）の顔を型取ったフルフェイスマスクだ。

「きゃあああ!」

えりは大声を上げた。

「嘘だろ、、、」

ボウズも震えていた。

「あ、あれ、、、」

ななは何かを見つけた。見ると、はるなのかばんが落ちていた。中身は空っぽになっていた。

「どういうことだ、、、？」

純は険しい顔になった。その時、

”トン”

ナンナンの背中になにか当たった。

「わっ！」

ナンナンは一瞬びっくりした。そして振り返ってみると紙ヒコーキが落ちていた。

「な、なんだ？」

ナンナンは紙ヒコーキを広げてみた。すると、、

「！！」

一同は青ざめた。

こう書かれてあった。

『お前たちは悪い人間だ。おしおきしてやる。ドアには鍵をかけた。警察に言ったら殺す。』

その2へつづく、、、、。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6940i/>

廃校の悪夢 その1

2010年10月8日15時13分発行